

feature interview

DJ TAIKI feat. DJ HAZIME

DJ TAIKIに“NO DOUBT”を通してHARLEMの8年間を振り返ってもらった。聞き手は本人の希望によりDJ HAZIME。対談形式となった今回のインタビューはかなり濃い内容となった。必読!

DJ HAZIME (以下、H) : HARLEMがオープンした1997年から現在に至るまで、TAIKI君がクラブDJとして一貫して意識していることは?

DJ TAIKI (以下、T) : 一番重要なのはお客さんに楽しんでもらうことだけど、その楽しませ方っていうのはその時々で違うよね。8年もあれば、HIP HOPっていう音楽でも流れがあったりするから、その時その時の楽しませ方っていうのがあったりして。週末だし、大箱だし、お客さんにリピーターになってもらえるような内容にしなければいけないっていうのがあるって、結局それは純粋に楽しんでもらうことが一番かなと。

H : オープンした1997年から2000年、2000年から2002年、2002年から2005年というふうに8年を3つの時期に分けるとすると、オレはTAIKI君の言うようにお客さんも変わって来てるかなと思うの。最初はCAVE (当時渋谷に存在したHIP HOP系クラブ) 流れの人が多くて友人さん寄りだった気がするんですよ。もちろん、オープンしたばかりだったから箱の客っていうのがいなかったからそういう人達が多くて。

それから、だんだん“DADDY'S HOUSE”が定着したり“NO DOUBT”が定着したりしてもうちょっと一般層が友人さんの間に混ざってきたのが第二期で、第三期はその割合が変わって、土曜日に関して言えば一般層が増えたかなと。それで、TAIKI君が言っていた楽しませ方が、この3つの時期で変わるじゃないですか。初期の段階と今の第三期で、一番変わったなと思うところは?

T : 今HAZIMEが区切った第一期って、「当時これであがってたよな〜」って曲でも今聴くとけっこう地味だったりするんだよね。やっぱり、HIP HOPがアンダーグラウンドな音楽だったのが、今はアメリカのヒットチャートがほとんどHIP HOPですっていうような音楽に変わっちゃったっていう音楽の流れがあって。その過程の中でパーティーチューンがあったりとか、どんどん派手になっていった時代があったり。多分その派手な時期っていうのは、今で言う第二期目だったんだと思うんだけど。やっぱり第一期目は地味めというか、淡めだったような気がするんだよね。

で、第二期目ぐらいに入った時に、凄いやアゲアゲという派手派手な本場にパーティーチューンみたいな時代が来て、それでメディアとかテレビにもどんどん露出するようになって。もちろん、アメリカの音楽シーンも凄く変わったっていうのもあるんだけど。そこからHARLEMが変わったのかなと。音楽が変わったと同時に流れもガラッと変わっちゃったのかな、っていうのは凄く感じたね。パーティー感、メジャー感、ド派手なものに。そこから、今にかけては逆に取り戻して来たと思うんだよね。凄くミックスされてきたというか。今の区切りの第三期で言えば、凄く成熟したのかなと思う。成熟した安定感がHIP HOPの中に出て来たのかなと。

H : “NO DOUBT”にDJ HAZIMEを起用した理由は?(笑)

T : HAZIMEちゃんは当時、そのバランスが上手いというか、月一でNO DOUBTに入ってもらったりしてたけど、かけ方のバランスとか選曲の幅が良かった。例えば、パーティー寄りな時間もあるけどそうじゃない時とか、その区切りの選曲と内容のバランスが凄く良かったから、そういうDJに入ってもらおうとやり易いっていうのもあるし、安定したものを提供して行けるって思ったから。

H : 有り難うございます。“NO DOUBT”はMURO君やMISSIE、SAFARIと大所帯な曜日じゃ

ないですか。8年間で大きくは変わっていないけど、TAIKI君を柱にやっているわけですけど、長く成功させてる秘訣があれば是非聞かせて下さい。

T : みんなに言えることなんだけど、固まってないというか、自分の好きなものはちゃんと持っているんだけど、その時々で音楽の流れをちゃんと見れる人達だと思うんだよね。もちろん、クラブプレイするからちゃんとお客さんを見れるっていうのは当たり前なことなんだけども、音楽の流れを理解している人達だと思う。

例えば、自分の好きなこと、好きなものだけやっちゃうと、やっぱりそこだけになっちゃうんだよね。パーティーもの、アゲものが好きでお客さんをキョーキョー言わせて踊らせてるのが好きなDJって、そのDJの時間はそれでいいのかもしれないけど、やっぱり一晩を考えるとそうじゃないでしょ。みんなそれを解ってるDJ達だと思うし、バランスよくクラブの一晩を考えるとプログラムを頭の中で組み立てることが出来るDJ達、好きなものと自分がやるべきことを解ってるDJ達のかなと。固まらない、自分に意固地にならないっていうか。

H : まあね、HIP HOPって進化系の音楽でもんね。そこに追いつけとか、追ってなきゃいけないとか言うわけじゃないけど、多分自然にみんなやってる感じですよ。

T : 多分好きなんだよね。ホントにHIP HOPっていう音楽が好きだから、新しいものをみんな刺激的だなんて思ってるし、よく「新しいものつまらないよね」とかいう意見もたまに聞いたりするんだけど、オレは絶対DJはそれじゃダメだと思ってるもん。新しいものが刺激的だと思える、そういう音楽じゃないと、やっててもつまらないと思うし。その魅力に取り憑かれてるDJ達が、それをちゃんとお客さんたちに伝えることが出来ているのかなと。

H : こういう言い方もあんまり好きじゃないんだけど、日本語ラップに関して、TAIKI君もオレもアルバム作って日本のラッパーの人達に歌ってもらって、クラブプレイ以外の活動をしているじゃないですか。でも、日本語ラップのライブを観に行くとお客さんと、クラブのお客さんが年々離れて行ってる気がするんですよ。そこに対してTAIKI君はどう思いますか? オレはぶっちゃけ歯がゆい所があるんですよ。前はクラブで誰かがフリースタイルとかやるとそこだけで盛り上がりだとか、飛び入りライブとかも大歓迎な感じだったんだけど、今はそんな状況でもないかなというのがあるんで。そこに対してTAIKI君の意見を聞きたいなと。

T : うん、歯がゆいね。何かもう別ものとして捉えている人がほとんどなのかなって。オレらの中では同じジャンルのもっていう意識でやってるし、そういうものをみんなどんどん作れてると思うし、そういうものが出てくると思うんだけど、やっぱりクラブとライブが全く別になっちゃってるんだよね。そこを今、どうやって近づけるか。もちろん、一晩の中に日本語のHIP HOPのアーティストの曲が普通にかければそれは一番理想的だと思うし、そういうことがやりたいけど、なかなかそれが出来ない状況だよね。みんなお客さん見てDJしてるから、自分がDJとして感じちゃうんだよね「今これかけたらヤバイな」とか。そういう状況になっちゃったというのが、いまは良く見えないっていうのがあって。昔はもっと普通に密着してたのよ。HARLEMだってオープンして3~4年位までは、全然そういうのを普通にかけてた時期があったんだよね。でも、ある時期を境にそれが出来なく



なってきた。ってそれは何なんだろうね?

H : 8年間、NO DOUBTをやっている、一番インパクトに残っている事ってありますか?

T : 結構そこまでないんだよね。毎週やっているとそこまでないでしょ?

H : あ〜オレはないね、オレは今年のリリバの時だもん。記憶なくしてDJやったの初めてだからね、オレ。だから、オレに8年間を振り返って言ったら、凄く最近だけのこと言っちゃうかも。それが、“NO DOUBT”でDJやった最初の日かな。なんかわからないけどアガった。緊張するとかじゃなくて、もう毛穴全開って感じだったよ。そういうの何かありますか?

T : HARLEMって大箱だし、ブースがフロアから見にくい箱だから、「DJ酔ってるから仕方ないよね〜」とか、そういうのが許される箱じゃないじゃん、HARLEMは。どっか自分が冷静じゃないといけないとか、飲んでても仕事出来るっていう自信がなきゃいけないっていうのもあるから、なかなかそういう失敗とかっていいのがないんだよね。

H : じゃあ、酒の話が出たところで、“この客すごかったな〜”って客はいる?

T : MAKI THE MAGICぐらいかな〜(笑)。

H : (笑)。客じゃないじゃん(笑)。でもオレも一番凄いのってマキ君かもな〜。まあ、それは置いておいて、お客さんは?

T : 昔はわりとトラブルとかあったりしたじゃん。ここ何年かは全く無くなったね。これは、クラブ自体が凄く成熟して、俗にテレビとかドラマとかに出てくる“いかがわしい”クラブ像ではないよね。ああいう偏見とかいい加減やめて欲しいっていうのもあるし、実際HARLEMは音楽を楽しんだりクラブで遊ぶのを楽しんでる人達が多い箱だと思うし。そういう面では、ホントにいい店になったな〜って。

H : オレもTAIKI君も、地方営業に行くじゃないですか。地方の箱だと、ビックリするくらい何かと行き届いていない所が多いでしょ。ブースまわり然り、スタッフの対応然り。もちろん“NO DOUBT”で8年やって来てるけど、HARLEM自体も8年続いているわけで、他のクラブと比べて、何がHARLEMの一番気が効いていたところだと思います?

T : お客さんの声とか、DJの声とか、スタッフの人達が自分達で感じている事とかをちゃんとフィードバックさせて、すぐに行動に移してくれているところが一番じゃない? 例えばDJからしてもさ、「ブースが暗くて見えにくいからちょっと明るくして」って言えば、次の週には明るくなってわけじゃん。でも、そういう対応って、地方とかにはないじゃん。都内とかでも結構なったりするよ。それは、ブースまわりだけじゃなくても、色んなところに出てきていると思う。

H : オレさ、トイレが汚いクラブとかって基本的に嫌いな。それもHARLEMに関してはないしね。

T : スタッフの努力とかは、これだけ続けてそれを維持して、毎年毎年どんどんいい店になってきていると思うのね。なので、それはやっぱりスタッフの人達が敏感に色んなことを感じ取って、やってくれてるおかげかなって思う。この、8年間を振り返って話来た時思ったんだけど、HIP HOPっていう音楽が凄く成熟した気がしたんだよね。もともと、8年前位は、HIP HOPのクラブでこれだけ楽しめなかったもん。お客さんは大抵2~3年のローテーションで変わっていくと思うのね。でも、やってる人達のDJとかスタッフとかそこに居る人達っていうのはずっといるわけじゃん。だから、みんながそれだけ成熟しているっていうのが凄く感じるんだよね。

DJも8年で、大きいパーティーでも何でも出来るようになってるし、音楽も良くなって、店も良くなって。だから、未来も感じるしね。DJもHARLEMでやってる人達って、10年以上クラブDJとしてやってきている人達がほとんどだし、色んなテクニックとか、選曲の武器とか沢山持っている人達だから、クラブDJとしてはホントに懐が深い人達が沢山居るから、それをちゃんと表現出来る店かなって思う。

H : 今、懐の話が出ましたが、オレ的には現状の火・金・土のレギュラーDJが更に8年後までやっていくって、良くも悪くもあると思うんですよ。オープンしてから16年間DJが変わらないっていうのも。そこには、若手のDJがどんどん台頭していかなければいけないじゃないですか。長く続ける以外に、DJとしての懐の深さを見に付けるためには、何が必要だと思いますか?